

研究課題： 摂食・嚥下障害患者における経口摂取ならびにその意欲と口腔内環境の関係  
研究者名： 井上 誠  
所属： 新潟大学大学院医歯学総合研究科

近年、口腔衛生状態の改善が誤嚥性肺炎の予防につながることを示されているが、口腔衛生管理と嚥下機能、栄養状態などの関係については疫学調査以外の有用なデータが得られておらず、食べることで唾液などの分泌量が多くなることで衛生状態の改善につながるのか、衛生状態の改善が口腔機能の改善に寄与することで食べられるようになるのかなど、これらの因果関係を考えることは、嚥下障害の臨床を進める臨床家にとっても必要である。本研究では、口腔内の水分量、細菌数、口腔衛生状態と嚥下機能との関係を調べて、これらの因子がどのように相互に関わるかについての予備的調査を行うこととした。

新潟大学医歯学総合病院に入院している患者において、摂食・嚥下機能回復部（以下、当部）に嚥下機能障害の評価依頼があった患者のうち、研究に同意の得られた5名（男性3名、平均年齢  $76.8 \pm 1.9$  歳）を調査対象とした。嚥下障害の原因疾患は脳梗塞後遺症、肝細胞癌術後、当部初診時の栄養摂取状況は全員が非経口摂取であった。当科が作成した摂食・嚥下評価表を用いた摂食・嚥下機能検査から歯科医師、または歯科医師の指示のもとで歯科衛生士が口腔衛生管理を実施した。歯科衛生士による専門的口腔ケア介入開始時の口腔内水分量、唾液分泌量、口腔内微生物量を含む口腔環境、摂食機能について調査を行った。

摂食・嚥下機能のスクリーニング検査結果と口腔内水分量、唾液分泌量、細菌数などの口腔環境との間に有意な相関は得られなかった。このことは、摂食機能や摂食状態と口腔衛生状態との間の関連を否定することを示唆するものの、今回は被験者数が少なかったことや疾患が多岐にわたっていたことなどから、さらなる調査の継続が必要であると考えられた。口腔内の湿潤は唾液分泌量に依存し、その結果水分量やひいては口腔内の細菌数に関連することが示唆されることから、これらの相関を検索した。各被験者の介入期間が1-2か月に及んだことから、被験者ごとにそれぞれの相関を検索したところ、頬粘膜水分値と舌水分値のみ、1名を除いて有意な正の相関を示した ( $y = -1.75x + 28.7, R^2 = 0.0078$ ;  $y = 0.8129x + 6.3943, R^2 = 0.803$ ;  $y = 0.9989x - 0.0719, R^2 = 0.9926$ ;  $y = 0.4748x + 14.644, R^2 = 0.5015$ ;  $y = 0.998x + 2.2802, R^2 = 0.9355$ )。これらの結果のみで、互いの相関を否定することはできないが、口腔ケアの介入による口腔衛生状態の改善は、刺激に伴う唾液分泌がもたらす自浄作用などにつながるという安易な結論が導き出せないことが予想される。今回は、被験者数の問題、多様な疾患、食事摂取状況の違いなど、結果を左右する要因については検討できていないことから更なる検索を要すると思われる。